

琉球大学学術リポジトリ

ビデオ・フィードバックを用いた自閉症圏障害児と母親に対するコミュニケーション支援

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属障害児教育実践センター 公開日: 2008-03-10 キーワード (Ja): キーワード (En): autistic spectrum disorder, affective communication, relationship disturbance, videotape feedback, PAC analysis 作成者: 財部, 盛久, Takarabe, Morihisa メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/5073

ビデオ・フィードバックを用いた 自閉症圏障害児と母親に対するコミュニケーション支援

財 部 盛 久

Communication Support Using Videotape Feedback Procedure in an Infant with Autistic Spectrum Disorder and a Mother who has an Infant with Autistic Spectrum Disorder

Morihisa TAKARABE*

The present study examined the effectiveness of videotape feedback procedure in the development process of affective communication between an infant with autistic spectrum disorder and a mother who has an infant with autistic spectrum disorder, and mother's change in the manner of talking and behavior towards her infant with affective communication developed. Videotape observations at her home and videotape feedback interviews were conducted. As a result, the manner of talking and behavior towards her infant and the point of view understanding to her infant were changed. At the same time, mother-infant interactions were activated and affective communication between mother and infant was developed. Using PAC analysis, it could be confirmed that the mother had positive image for her infant. Based on these results, the effectiveness of videotape feedback procedure and PAC analysis were discussed.

Key words : autistic spectrum disorder, affective communication, relationship disturbance, videotape feedback, PAC analysis

I. はじめに

自閉症の本質についての考え方はこれまでに幾度かの変遷があり、1980年代後半からはそれまでの言語・認知障害説にかわり社会性障害という見方に変わってきている。これはKanner (Kanner, 1943)⁵⁾の提起した概念であり、それゆえカナーへの回帰といわれている¹⁷⁾。最近では社会性障害について心の理論 (Baron-Cohen, 1988)¹¹⁾、実行機能 (Ozonoff et al, 1991)¹⁸⁾、感情理論 (Hobson, 1989)²⁾などの考え方により検討されている。これらは自閉症を個体内部の問題として

捉える個体能力発達論の立場である。これに対し Sameroff (1993)²¹⁾の交互発達モデルや鯨岡 (1999)⁹⁾の関係発達論の考えを基礎に、自閉症を関係障害としてとらえる立場がある^{10)~13)}。

小林は自閉症の社会性障害をコミュニケーションの問題として捉え臨床実践を重ねている。そしてコミュニケーションを鯨岡 (1997, 1998 b)^{6), 8)}の主張する情報のやりとりという象徴水準の形態である象徴的コミュニケーションと気持ちが通底するという情動水準のコミュニケーションである情動的コミュニケーションの二重構造として捉えている^{10)~13)}。情動的コミュニケーションは無様式知覚²²⁾により活性化されるが、自閉症においては接近・回避動因の葛藤¹⁹⁾のため養育者との愛着関係が深まりにくく、情動的コミュニケー

*Faculty of Education, Univ. of the Ryukyus

ションも深まりにくい。そのため、子どもの側に愛着行動が出現し、情動的コミュニケーションを深めることが介入の第一歩になることを指摘している^{10), 13)}。

財部 (2000)²⁴⁾ は精神遅滞児と母親の自由遊び場面のやりとりをビデオテープに収録し、そのやりとりを母親にフィードバックすることで、母子間の情動的コミュニケーションが進展することを報告した。その過程で母親は、ビデオテープに映し出される母子のやりとりを見ても、子どもがどのような意図で行動しているのか理解できず、母親の意図によって一方的に働きかける状態から、子どもの意図は理解しながらも意図に沿った行動ができない状態を経て、子どもの意図に沿い子どもと一体になったやりとりが可能になることを見いだした。つまり、母親の子ども理解の視点が変わることにより双方のやりとりが活性化され、情動的コミュニケーションも深まった。このことは情動的コミュニケーションが深まるためには、養育者が子どもを理解するとき、養育者側の視点からだけでなく、子どもの側の視点に立つて理解できるようになることが必要なことを示しており、このときビデオ・フィードバックが有効であると指摘している。また、母親が子どもの視点に立ち行動を理解するとそれまで以上に子どもがかわいく見え、それまでとは関係が変わる^{23), 24)} ことが報告されているが、このとき母親は子どもをどのように認識しているのか明らかにはされていない。しかし、現実の母子交流の背後には母子双方の主観的体験による内的世界が存在し、母子交流の質そのものを大きく規定していることが指摘^{10), 13)} されており、母親の内的な世界では子どもがどのような存在として捉えられているのか明らかにすることは、養育支援には重要なことである。

このような個人の内的な世界を明らかにするものとして内藤 (1993, 1997)^{15), 16)} によって開発された手法が Personal Attitude Construct (個人別態度構造) 分析、いわゆる PAC 分析である。これは社会心理学の領域で開発されたものではあるが、当初から心理臨床への応用の可能性が指摘¹⁵⁾ されていた。PAC 分析の心理臨床への応用は井上 (1997, 1998)^{3), 4)} が最初で、発達障害の領域では棚原ら (1999)²⁵⁾ が用いてはいるが、ま

だ心理臨床への応用は少ない。井上 (1998)⁴⁾ はカウンセリング過程に PAC 分析を導入しその効果を大きく3つの分野に整理して検討している。すなわち第一の機能分野として1対1のカウンセリングの場におけるカウンセラーとクライアントの関係に注目した直接的精神間機能分野、第二がクライアント自身の内的世界とその変化に関する精神間機能分野、第三が第三者への働きかけにおける効果を検討する間接的精神間機能分野である。そして、PAC 分析の効果についてカウンセリング事例を通して、3つの分野に11の機能が存在し、有効に機能していることを明らかにした。

本研究では自閉症圏障害児と母親のコミュニケーションの進展におけるビデオ・フィードバックの有効性を検討し、その過程で母親の子どもに対する認識と働きかけがどのように変化するか明らかにする。その際、母親のわが子についての認識を PAC 分析を用いて明らかにし、発達臨床における PAC 分析の応用可能性についても検討する。

II. 方法

1. 対象

対象児雄一 (仮名) とその母親。インテーク時の雄一は4歳10カ月、3歳児健診で自閉症との診断を受ける。単語レベルの発語があり、乳幼児発達スケールによる発達年齢は1歳6カ月 (運動2 ; 9, 操作1 ; 8, 理解言語1 ; 4, 表出言語0 ; 11, 概念1 ; 8, 対子ども社会1 ; 1, 対成人社会1 ; 4, しつけ2 ; 0, 食事1 ; 8)。3歳10カ月より障害児保育を受けている。母親は37歳、32歳のとき本児を第1子として出産。雄一とともに2, 3カ月に1度Sセンターの言語訓練に通い、また週に1回学習塾にも通っている。

2. 主訴

S発達センターでもう少し言語訓練をすると伸びるといわれたので言語訓練をしてほしい。また、自閉傾向を減少させたい。

3. 生育歴

妊娠8カ月頃切迫早産といわれ、10カ月まで入院。退院1週間前に破水がある。10時間近くたっ

でも出産できないため陣痛促進剤を使用する。その後、母親の嘔吐が5、6回あり血圧も下がり、胎児の心音も弱くなったので帝王切開を行おうとしたが、子どもの頭が見えているというので、医師が母親の腹部を押し吸引分娩で出産する。生下時体重2624g。生後1週目で添い寝をしないと眠らず、夜は一緒にないと泣いてばかりいた。3、4カ月の時、母親に対しては微笑んだが他のひとはに微笑むことはなかった。人見知りや5～8カ月の頃はあり、普通の感じであった。母への後追いは5カ月頃始まり3歳半から4歳頃まで続いた。しかし、1歳半から2歳3、4カ月の頃はよそに預けても平気であった。7、8カ月頃からは伝い歩きをするようになったので、サークルに入れ鍵をすれば、それを見ていて鍵をはずした。1歳前に歩き始め、1歳10カ月から4歳過ぎまで多動であった。喃語が10カ月頃からはまったが、少なかった。発語は1歳から1歳半頃には「ハイ」「デンキ」、指さしをしながら「タータン(父)」「カータン(母)」、2歳には「シンコー(出発進行)」があったが、2歳過ぎになくなる。そのとき呼名に対して挙手する模倣もなくなる。その頃から天井を見上げてクルクル回る行動が出現する。3歳過ぎに「ママ(母)」が出るようになり、インテーク時には母親によると20語ほどの発語があるということであったが、はっきりと聞き取れなかった。なお、3歳10カ月から障害児保育を受けているが、睡眠障害のため生活リズムが一定していない。

4. 療育歴

1歳6カ月健診では問題はなく、3歳児健診で自閉症の診断を受け、地域の児童館へ通う。翌年4月より障害児保育を受け、2、3カ月に1度Sセンターの言語訓練を受けている。

5. 支援開始前のコミュニケーション

インテーク時のプレイルームでの母子間のやりとりは、母親が子どもに玩具を提示して雄一を遊びに誘うということが特徴である。母親は雄一に玩具を提示して雄一を遊びに誘おうとする。しかし雄一はその誘いに乗らず、母親から離れほかの玩具でひとり遊びを始める。すると母親は雄一に語りかけながら玩具に触れる。雄一は母親から離

れ、室内を跳び回る。雄一の興味が移ると母親はそれまで雄一が遊んでいた玩具を片づけ始め、母子のやりとりはなくなる。母親は自分のペースで働きかけ、雄一の行動の意図を考えているようには見えない。母親は雄一の行動や発音が理解できないとき、表情が硬くなり、ことばかけが少なくなる。そして、この状態のまま母親のペースで遊びに誘う。

雄一は発音はあるが、何を意図しているのかわかりにくい。しかし、快の時は笑顔を伴う発音、要求が通らないときなどの不快なときは大声を出している。雄一から母親に働きかけることは少なく、ひとり遊びになることが多い。

6. 支援方針

母子のコミュニケーションを分析すると、雄一は意図の分かりにくい発音や行動が多いが、よく観察するとその意図を理解することは可能である。しかし、母親は自分のペースで働きかけ雄一の意図に沿った働きかけにはなっていない。

以上のことから、母親が雄一の自発的な働きかけを受け止めると同時に、その意図を汲み取り、雄一の意図に沿った働きかけができるようになることで、母子間のコミュニケーションが活発になることを援助する。

7. 手続き

1) 支援期間および支援時間

X年4月～X+1年3月までの1年間に支援のためのセッション20回とフォロー・アップ(FU)セッション1回を行った。セッションは原則として週1回約1時間R大学にて行った。1回のセッションは30分がプレイルームにおける母子自由遊び、30分がビデオ・フィードバックに基づく面接である。FUセッション終了後2カ月間に4回の面接を行った。内訳は2回が全セッションを振り返っての感想や日常生活場面での雄一や家族に関する面接で、残り2回がPAC分析のための面接である。

2) 支援手続き

プレイルームにはトランポリン、マット、シーソー、三輪車、引き車、輪投げ、カラーリング、数種類の型はめ、パズルボックス、ぬいぐるみ、

テーブルと椅子が常備されており、雄一の様子を見ながらクレヨンや白紙など必要なものを用意した。

母親には家庭で遊ぶときと同じように自由に遊ぶことを教示し、母子の自由遊びを観察した。そして2台の8ミリビデオカメラで自由遊びを撮影するとともに、そのうちの1台のカメラの映像を同時にビデオテープに収録し、セッション終了時に家庭での観察用として母親に渡した。

自由遊び場面には母子の他に援助者として筆者と援助補助者1名、カメラ担当2名が参加し、援助者と援助補助者は関与しながらの観察¹²⁾を行った。

支援の具体的手続きはベースライン (BL) 期の後、介入方法の違いにより3期に分けて支援を行い、最終介入1カ月後にフォロー・アップを行った。

第I期の自由遊び場面では母子間のやりとりが活発化するように、援助者らが雄一の意図に沿って関わり、雄一とのやりとりを活発化するモデルを演じた。面接では、前回のセッションで母子間のやりとりがうまくかみ合っていないと見える場面を中心に編集したビデオテープを提示し、ビデオ・フィードバック面接を行った。ビデオ・フィードバック面接の手続きは財部 (2000)²⁰⁾と同様であるが、家庭で夫婦がビデオテープを視聴した後、アンケート用紙に記入することを依頼した。アンケートは①テープを見ての全体的印象、②ビデオを見て初めて気づいた親と子どもの行動および親子関係、③家庭と比較して気づく子どもの行動、④ビデオを見てから家庭で工夫した点、⑤質問ないし要望を夫婦が独自に記述するという内容である。さらに、雄一の日常生活の行動や母親の感じたことをノートに記録することも依頼した。

第II期では自由遊び場面で、援助者がモデルになることをせず、母子の求めに応じて最小限の援助に留めることを除くと第I期と同様である。

第III期はビデオによるモデル提示、すなわち母親と援助者が面接しているあいだに、雄一と援助補助者との自由遊びをVTRに収録し、それを約10分に編集したビデオテープを家庭で視聴後、その印象を記入する手続きを加えた。そして、セッション場面のビデオテープ視聴後のアンケートに、

うまくやりとりができていたと感じた点とできなかったと感じた点を記述する項目、およびやりとり全体を100点満点で自己採点する項目を加えたが、それ以外は第II期と同様である。

第III期終了1カ月月後にFUセッション1回を行った。

8. 分析と評価

自由遊び場面での母子間のコミュニケーションは財部 (2000)²³⁾にしたがって分析し評価した。すなわち、Communication Unit (CU) と Interaction Unit (IU) を決定し、IUをやりとりとして数えた。そして、前後の文脈からIUの始発者の意図が達成されたか否かによって、コミュニケーションの成立と不成立と分類した。厳密にこれを分類することは困難であるため、援助者、援助補助者、カメラ担当者の3名が、各々が感じとったその場の雰囲気を加味しながら評価基準にしたがい独立に分類した。不一致については三者の話し合いにより決定した。三者間の一致率は平均87.3% (65~100%)であった。

また、子どもについての理解と認識については自由遊びのトランスクリプトおよび映像、アンケート、日常生活の記録をもとに分析と評価を行った。そして、母親の子どもに対するイメージはPAC分析を用いて分析した。PAC分析は「子どもについて」並びに「子どもに接する私」というふたつの側面について、内藤 (1993, 1997)^{15), 16)}にしたがい実施した。刺激語はそれぞれ、「発達に遅れのある雄一君について頭に浮かんだ特徴、様子、イメージをことばにしてすべて述べてください」、「雄一君に接するあなた自身について頭に浮かんだ特徴、様子、イメージをことばにしてすべて述べてください」である。

III. 支援経過

1. 自由遊び場面でのコミュニケーション

支援はBL期の後、介入方法の違いにより3期に分けて行った。ここではBL期からフォロー・アップFU期まで時間経過にしたがい、自由遊び場面における母子間のコミュニケーションの様相を明らかにする。

ベースライン期は、子どもの行動特徴および母親の子どもに対する働きかけを観察するとともに、母子のセッション場面への順化を図ることを目的としているため、特別に介入することはしていない。そのため、母子間のやりとりは支援開始前と変わりはない。エピソード1は第2セッションのやりとりで、この時期の典型のひとつである。

〈エピソード1〉

雄一と母親は棚から数個のブロックを取り出す。母親は「エー、ビー、シー、ディー、イー、エフ、ジー・・・」と歌いブロックを見ている。雄一はサイコロのブロックを自分の方に回転させながら引き寄せ、サイコロの面をじっと見ている。雄一がブロックを手にとると母親もブロックに手を添え、一緒に回転させながら「サイコロ、1, 2, 3, 4, 5, 6」と指さしをして数える。雄一は母親のことばを気に留める様子ではなく、サイコロの面を見て笑う。母親はサイコロの面を指さしながら「1, 2, 3・・・」と数えるが、雄一はそれには応じず、辺りを見回している。母親は一度棚を見て雄一に「どうする?」と問いかけ、床のブロックを積み重ねる。母親はブロックの上に雄一の手があることに気づき、雄一の手をよける。雄一は重ねられたブロックを見ていたが、それを押すようにして床に落とす。すると母親は人形を差し出して「雄一君遊びましょう」と語りかけるが、雄一は母親の差し出す人形を見て「ファー」といって母親から離れ駆けだしていく。カメラの前を通り過ぎ、あたりを見ながら歩き、棚の方を見る。母親は雄一が落としたブロックを並べ、何か遊ぶものはないかと探すかのように棚をのぞいている。雄一が棚に行き、型はめを取り出すが母親はそんな雄一を見ることなく、棚からぬいぐるみを取り出し、それを揺らしながら雄一に差し出すので、雄一は型はめを落とし、ぬいぐるみに手を差し出す。

母親は雄一と遊ぶようとしてブロックや人形を使いさかんに誘う。しかし、雄一は母親の誘いに応じることなくブロックに魅入ったり、あたりを見まわしたりしている。それにも関わらず母親は雄一に働きかけている。雄一の動きを見ていれば何に興味を示しているのかわかるように思えるのだ

が、母親にはその余裕がない。雄一が母親を離れると、何をするか見ることはなく、次の遊具を探す。そして雄一が視界にはいると母親の関わりたいという強い思いで一方向的に働きかけ、親子のやりとりはかみ合っていないように見える。

図1は親子のコミュニケーションが成立したと判定されたIUの時間を合計し、全IUの時間で除して得られた値、すなわち1回のセッションのなかでコミュニケーションが成立した時間の割合を示している。上述したようなやりとりが多いため、ベースライン期はコミュニケーションとして成立したやりとりがきわめて低いことを示している。

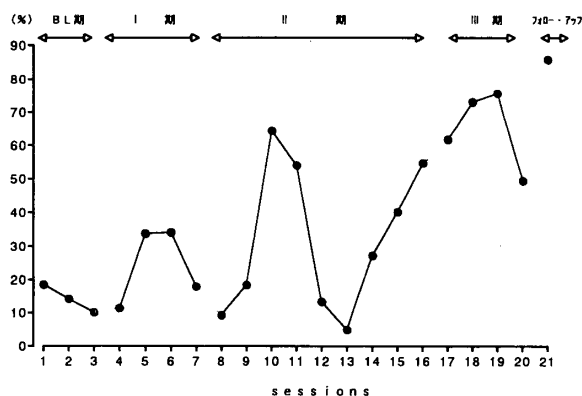


図1 雄一と母親の成立したコミュニケーション

第I期では子どもをよく見て、子どもの意図を理解したうえで働きかけることを助言する。また、母親が余裕を持って子どもを見ながら働きかけることができるように、援助者と援助補助者が母親のモデル役として遊びに参加する。

援助者らが雄一に関わると、雄一と援助者らの遊びは活性化するが母親が参加しなくなるため、母親との関わりがなくなってしまう。また、援助者らが関わることを控えると母親主導の一方向的な関わりとなってしまう援助者らがモデルの役割を果たすことが難しかった。エピソード2は第5セッションでの母親主導の働きかけを示すエピソードである。

〈エピソード2〉

雄一は母親にグルグル振り回してもらって遊んでいる。母親が雄一をおろしたとき、雄一は椅子に張ってある備品番号のシールが目にはいり、そ

れに魅入る。母親はシールを指さし「字が書いてある」「リュウキュウダイガク」と雄一に語りかける。雄一は魅入っていて母の語りかけに反応しない。すると母親はシールを指さし語りかける。雄一は立ち上がるが、母親は雄一の手を取りグルグル回しを始める。雄一はグルグル回っているときも、何回も椅子に目をやる。そして、母親から離れ椅子の前にしゃがみシールに魅入る。母親は雄一の横に来て「青いのに書いてある」「いち、いち」と語りかけるが、雄一は立ち上がり反対側の椅子の前に座りシールに魅入る。また母親はやってきて「同じだね」「同じ」と雄一に語りかける。雄一は「オイオイ」「アー」といいながら再び母親から離れる。

雄一は母親に抱かれ、反り返るようにしながら振り回してもらって遊んでいる。何回か振り回した後、母親が雄一をおろすと雄一は椅子に張ってある備品番号のシールの前に座り込みジッと魅入っている。母親はシールの文字を読んでやるが、雄一は「ひとりで見たい」というかのように母親から離れて、他の椅子のシールに魅入る。しかし、母親は雄一がひとりで魅入ることをさせない。母親が指さしたり、シールを読み上げたりするたびに雄一は母親から離れるのだが、そのたびに母親が雄一を追いかけていく。母親の子どもと一緒に遊びたい、という思いは強く感じられるが、母親は雄一の意図を理解し、雄一の意図に沿った働きかけをしているようには見えない。

図1に示すようにコミュニケーションの成立は5、6セッションで30%を越えるだけである。5、6セッションは上述したような体を使っての遊びで、振り回したり、抱きかかえての遊びの時は母子一体となって遊んでいるように見える。ところが、型はめやブロックを使っての遊びになると母親は、雄一の遊びを観察することなく母親主導の働きかけが多くなる。その結果、雄一は母親の働きかけに応じることなく、母親から離れ、棚に昇るなどの行動が増加し、母子間には相互のやりとりが成立しなくなる。

第Ⅱ期では援助者らがモデルの役割を取りながら参加することを子どもや母親から求められたときだけに限定したが、第Ⅰ期と同様、子どもをよ

く見て、子どもの意図を理解したうえで働きかけることを助言する。これは、援助者らが雄一と関わると母親が子どもとの遊びに参加できなくなってしまうこと、および母親が子どもの行動だけでなく援助者の行動を観察する余裕がないので、母親が子どもを観察する余裕ができるまで限定された場面のみ参加して、モデルの行動を観察してもらおうと考えたからである。しかし、母親は子どもの行動をよく観察して働きかけることが必要なことを理解はしているようであったが、具体的にどのように働きかけたらいいのかの理解はできていないようであった。そこで、援助補助者と雄一が遊んでいる場面を収録したビデオテープを母親に提示し、ビデオテープによる観察の機会を設けた。

第Ⅱ期序盤では母親が働きかけると雄一が嫌がっていることは理解しながらも、これまでと同様、母親主導でやりとりを展開しようとした。エピソード3は第8セッションにおけるやりとりである。

＜エピソード3＞

雄一は三角や四角などの形の型はめ板を床に並べている。その中から円形の板をとり、窓の方に歩いていく。歩きながら丸い板を手にかざし、手首をクックッと折るようにして目の前で板を揺らしている。窓のところからもとの場所に戻るが板は同じようクックッと揺すっている。母親が近寄り何かいうと雄一は三角の板を持ち、窓のところへ走っていく。「ンワワー、ンワワー」といいながら目の前で三角の板を揺らしている。そして揺らすのを止めて板に魅入り、また揺らすことを繰り返している。母親は三角の枠板を持って近づき「三角だ、三角だ」といいながら、「三角の板はこっちに入れるんだよ」といわんばかりに、枠板の三角の穴から手を出してみせる。雄一が反応しないので、母親は穴から手を出し「かゆい、こちょこちょこちょ」とくすぐるまねをしながら雄一の肩に触る。雄一は母から逃げるようにマットのところへ行く。母親は「雄一、ここも三角だよ」と穴から手を出し雄一に注目させようとするが、雄一は「嫌だよ」とでもいいたげに母親の手を払いのけて横を通り抜ける。

雄一は目の前で板を揺らしながら、それを楽しんでいるように見える。確かに雄一の手にしては板は型はめに使うものではあるが、雄一にとっては目の前で揺らすと快適な世界をもたらしてくれるモノのようである。しかし、母親にとっては型はめに使う板であり、特定の名前があり、枠板とそれに合う板と一対となっていると認識されている。そのため母親は母親自身が認識している使い方で子どもに遊ぼうと誘っている。それは子どもと世界を共有するというのではなく、母親の認識世界に誘い込もうとしているように見える。

母親はビデオ・フィードバック面接でこの映像が提示されると、雄一のやりたいことを妨害していることには気づいているが、このような場面ではどのように働きかけたらいいかわからないと語る。そこで、援助者と母親の面接中に援助補助者と雄一が遊んでいるときに撮影したビデオテープの中から、同様の場面を編集して第10セッションの面接で提示した。ここでは、雄一が型はめの板を机の上で並べたり、魅入っているとき、援助補助者は雄一と同じように魅入って、雄一と目が合うと「いいね」「よかったね」と声をかけると、雄一が笑顔で援助補助者の顔を触る場面である。

このビデオを提示した後のセッションでは、これまで助言してきた子どもの行動をよく見て、その意図を理解して働きかける、ということが徐々にやりとりに反映されてきた。エピソード4は第12セッションにおけるやりとりである。

<エピソード4>

雄一は床に型はめ板を並べている。それを見て母親は「四角、四角」「いろいろあるね」と語りかける。そして、テーブルの上にある円形の板をとり「雄一、まる」といってみせるが雄一は見ようとしない。雄一は四角の板を取り、目の前でカクカクと揺らしながらテーブルに近づき円形の板に持ち替える。それを目の前で揺らしながら窓のところへいく。母親は「まる」といって、腕を後ろに組み雄一の後をついていく。雄一が母親の方を向くと母親は「まん丸ちゃん」と雄一に語りかける。母親が近づくと雄一はテーブルへと移動するが、母親は手を後ろに組んだまま「まーんまる、

まーんまる、まーんまる、町に行く」と歌う。雄一はテーブルの上の三角の板を取り目の前で揺らしながら窓際のマットへ向かう。母親は手を組んだまま「町へ行く、三角、三角」と歌って近づく。雄一は途中で立ち止まり、板を激しく揺らしている。母親が近づいてくると雄一はマットに向かい、マットの上で三角の板を転がす。そこへ母親が腕を組み「三角ちゃんが、町へ行く、三角、三角、三角」と歌いながら近づいてくると雄一は激しく板を揺すりながらテーブルの方に走っていく。

雄一が型はめのはめ板を揺らすとき、母親は腕を後ろに組んでことばをかけている。雄一が遊んでいるとき、母親がよけいな手を出してはいけなと理解したことを、腕を後ろに組むという行動で表している。ところが手を出すことはなくても、形の名前を言いながら語りかけ、誘い込もうとしていることには変わりなく、雄一は母親のことばかけから逃れるかのように板を揺らしている。ビデオテープで援助補助者の行動を見て、手を出さない行動は取り入れたものの、本当の意味で理解したことにはなっていない。

このようなやりとりが14セッションからは徐々に雄一の意図を理解し、それに沿って働きかけるように変わってきた。エピソード5は第16セッションにおけるやりとりを示している。

<エピソード5>

雄一は棚の前で小文字板を並べて遊んでいたが、顔を上げ前方の壁を見る。母親は床に座り微笑みながら雄一の顔を見ている。そして母親も雄一の見ている方向に視線を移し、しばらく見ていたが、ゆっくりと雄一の方を振り向き、ニッコリと微笑み「見える」と語りかける。雄一は母親をチラッと見て、口を開けたまま壁を見ている。母親も床に手をつき雄一の見ていると壁を見ている。しばらくそうしていたが、雄一が母親の顔を見たので「何が見える」と母親は優しく語りかける。雄一はそれには応えないが母親の顔を見ている。母親も雄一と向かい合うようにして座り雄一を見る。しばらく見つめ合い、母親が斜め上に視線を移すと雄一は棚のなかを見る。雄一が「シッ、ンー、イッコー」と声を発すると母親は笑顔で「ンー」

といい雄一の顔を見る。雄一は母親を見て、母親は雄一を見てニッコリする。

ここでは母親が雄一の見ているところをジッと同じ視点で見ている。働きかけも微笑みと優しい声かけで、雄一の動きに合わせたゆったりとした感じである。雄一はこれまでと違い、安心して壁に魅入ることができるだけでなく、母親と一体となったように、ゆったりとした動きで心地よい感じが見て取れる。

図1では第10、11セッションのコミュニケーション成立が高くなっているが、これは母親が雄一を振り回したり、負ぶってのやりとりである。このような動的な遊び以外では、母親が雄一を遊びに誘い込もうとして、雄一が母親から離れしてしまうことが度々観察された。第14セッション以降は上述したように、母親が雄一の行動を見守ることが多くなり、雄一の遊びも持続するようになった。しかし、母親が雄一の意図に沿った働きかけを行い、相互のやりとりが自然に感じられるまでには至らなかった。

そこで第Ⅲ期では、自由遊び場面での援助者らの関わりは第Ⅱ期同様最小限にし、雄一と援助補助者のやりとりを編集したビデオテープを自宅で見るという手続きを導入した。これは第10セッションの面接時に提示したテープの観察が、母親には大きな効果をもたらしたからである。

このテープでは援助補助者が雄一と同じ視点に立ち遊びに参加し、雄一の声や行動をまね、雄一の気持ちを言語化し、彼の意図に沿った働きかけをする。すると、雄一は援助補助者におんぶやだっこを要求し、声を発しながら援助補助者とやりとりを展開する場面が収録してある。

このテープを見るようになってから母親は雄一の視点に立ち働きかけ、雄一の声や行動をまねすることが見られるようになった。エピソード6は第19セッションにおけるやりとりである。

<エピソード6>

雄一は小文字板を目の前でカクカクと揺らしながら走ってマットへ行き、マットに上り天井を見る。母親は雄一の後からマットに行き、マットにもたれるようにして雄一の見ている天井を見る。

母親がマットに座ると雄一は母親の膝に乗り、母親の顔に自分の顔を近づけ母親の顔をじっと見る。そして、雄一は母親の顎を押し上げ、母親の顔に雄一の頬をくっつける。母親は雄一のするように身を任せている。雄一は母親を見て「ウワッ」と笑い、母親も雄一を見て「ウフッ」と笑う。雄一は母親の肩をつかんでマットの上に立ち、文字板を目の前で揺らし、窓の方を向く。雄一が文字板で窓をたたき、出る音を二人で聞いている。雄一が再び文字板を揺ると母親もじっと文字板を見ている。

雄一は板を目の前で揺らしながら走っているが母親はゆっくり後をついていく。雄一が天井を見ていると同じように天井を見る。雄一が母親の膝に乗り、母親の顔をのぞき込んでも頬をくっつけてきても雄一に身を任せている。これまで見られた母親からの誘い込みは全く見られない。母親は雄一の世界に浸り込むかのように、雄一の動きに一体化している。その場にいた援助者らにも、落ち着いたほのぼのとした雰囲気伝わってくる。

図1では17～19セッションにかけてコミュニケーション成立の割合が急速に高まっているが、第20セッションでは急に低下している。これはセッション前半で雄一がこれまでにない遊びを展開したため、母親がこれに戸惑い、応じきれなかったからである。後半からは雄一の意図に沿ってやりとりが展開されたが、このようなことはこれまで見られなかったことである。このことは母親が雄一の意図を感じ取り、それに対して柔軟に応じることができるようになったことを示している。

フォロー・アップは最終セッションからひと月おいてのセッションであったが大きな変化が見られた。雄一が母親の行動を模倣することが増加したことである。エピソード7はフォロー・アップセッションでのやりとりである。

<エピソード7>

雄一が声を出して床をクルクル回ると母親も同じようにクルクル回っている。雄一が立ち止まり手で顔を隠す。母親は雄一に近づき雄一の顔をのぞき込む。雄一が手を取り顔を出すと次は母親が顔を隠す。雄一が母親の顔をのぞき込むと母親は

「ワッ」とでもいうような勢いで手を取り、雄一の顔を見る。雄一が母親の顔を見ながらシャツを持ち上げ腹部を出すと、母親は「ブーする」といって雄一の腹部に息を吹きかける。すると雄一は飛び跳ねて部屋の中を動き回る。そんな雄一を見ながら母親は「そうさ100%勇気、もうがんばるしかないさー・・・」と手を振り足踏みしながら歌う。雄一は母親を見ながら母親がするように両手を広げ足踏みをする。母親が両手を広げ歌いながら歩き回ると雄一も母親について同じ動作をしながら歩いていく。母親が歌うと雄一は「ウウウ」
と声を出して笑う。母親が歩くのをやめて足踏みし始めると雄一は母親と向かい合い、両手をあげて足踏みをする。

雄一の回転する動きや顔を隠す行動に合わせていた母親が、歌いながら足踏みたり両手を広げ歩き回ると、雄一も母親と同じ行動をする。しかも母親の歌声にあわせるかのように雄一は発声する。母親は最初、雄一の意図に沿い雄一をなぞるよう
に行動した。その後母親はそれとなく雄一を誘うようにして歌い始め、雄一が誘いに乗ってくるとさらに母親は誘い込んでいった。雄一は母親のまねをすることが増加したが、これは母親が自分の意図する行動に巻き込むようにして、うまく雄一を誘い込むことができるようになったことを示している。

このように雄一と母親のコミュニケーションは自由遊び場面で活性化され深化しただけではなく、支援終了後も日々の生活の中でさらに活性化され深化していることが明らかとなった。

2. ビデオ・フィードバック

1) ビデオ・フィードバック面接

面接で提示した場面は第Ⅰ期および第Ⅱ期では母親が雄一の意図を理解しないまま、雄一を遊びに誘い込もうとしている場面を中心に提示した。第Ⅲ期ではこの場面のほかに、自然なやりとりが展開されている場面も提示した。これは母親が自分自身と親子の関係が変化したことを自己確認するためである。

第Ⅰ期では提示した後には何か気づくことはないか尋ねても「雄一がいろいろなことに気づくよう

に語りかけないといけない」や「雄一に対して喜びそうな働きかけやことばかけをたくさんしないといけないが、まだ足りないようだ」という返答が多かった。

第Ⅱ期になると中盤までは「雄一のやりたいことがわからないと落ち着かなく、つい手が出てしまう」「手を出さないように見ていようと思うが、つい手が出てしまう」という雄一の遊びに手を出してしまう自分に気づき、雄一の気持ちは分かっていても行動が伴わないことを訴える。しかし、終盤では「雄一に迷惑な関わりをしていたのではないか」というような、雄一の視点から自分の働きかけを見ての気づきを語る。

第Ⅲ期では「気持ちのずれが少なくなったように見える」「自分が落ち着いていると、雄一も落ち着いている」ということを語り、「やっぱりここだろうと思った」とうまく応答できなかった場面として提示されることを予測するようになった。

2) 自宅における母子自由遊びの観察

自由遊び場面を収録したテープをセッション終了時に母親に渡すのは、これを自宅で母親だけでなく父親も見て、父親の子ども理解が深まり、適切な関わり方がとれることを目的としている。今回はテープを見た後に記入するアンケートをもとに母親が自分自身と雄一、および両者の関係をどのように認識していたのかを明らかにする。

表1はテープを見て初めて気づいた雄一と母親の行動、親子の関係および日常生活で工夫するようになった主な事柄について3期に分けて示している。

雄一の行動について第Ⅰ期では、雄一の楽しそうな行動に気づいているが、これには母親が誤解してそう認識している行動が多数含まれている。つまり、実際の親子のやりとり場面では、雄一が母親の働きかけから逃れようとしているときでも、楽しいと認識している行動が多数含まれている。これは母親が自分の視点からのみ雄一の行動を理解していることを示している。第Ⅱ期では雄一が母親の働きかけから逃れようとしたり拒否していることに気づき、その行動の意味が理解できるようになった。これは雄一の視点で行動を理解することが可能になったことを示している。第Ⅲ期では雄一の視点からの行動理解が更に深まり、母親

の意図に沿わない雄一の行動について、その意味を理解するだけでなく、雄一の示す行動のひとつひとつに込められている意図を理解しようとするようになっていく。

自分自身の行動について第Ⅰ期では、積極的にリラックスしているがことばかけの少ない自己という認識である。実際のやりとりでは母親が子どもを誘い込もうとしている行動がこれにあたる。ここにも母親の視点からのみ行動を理解していることが現れている。第Ⅱ期では中盤までは子どもを見守ることができない自己に気づき、終盤になり子どもの気持ちも引きつけている自己に気づいている。第Ⅲ期ではうまく関わっていると認識しながらも子どもの気持ちや意図を理解しながらそれに添えない自己のギャップに気づいている。

親子の関係については第Ⅰ期では楽しく、親がいると子どもは安心してきている関係と認識し、第Ⅱ期では中盤までは楽しくない、つまらない関係で、終盤が楽しく、気持ちが通じ合った関係との認識である。第Ⅲ期になるといい雰囲気や自然な関係との認識に変わる。

これらに共通するのは第Ⅰ期では母親は自分の視点から行動や関係を理解しているが、第Ⅱ期に入ると雄一の視点に立ち行動や関係を理解していることである。さらに第Ⅲ期では雄一の行動の意図など直接観察できないことについても雄一の立場に立ち理解するようになっており、認識の仕方が母親のみの視点から母子相互の視点へと変化していることを示している。

3) ビデオテープによるモデルの観察

表2は援助補助者と雄一の自由遊び場を自宅

で観察した後の母親の感想である。母親はモデルである援助補助者と雄一のやりとりを観察し、援助補助者が雄一の気持ちに敏感に反応していることや雄一のまねをすることで、雄一が安心して甘えることに気づいている。そして、声の出し方も大事で、直接手を出して関わらなくても雄一の気持ちを引きつけることができることに気づいている。雄一が母親と遊んでいるときは違う行動を目の当たりにすることで、母親に欠けているものが何か明瞭になったことを示している。

3. 全セッション終了後の面接

約1年間に雄一と母親がどのように変化したと思うか質問して得られた主な変化が表3に示してある。

子どもの変化として行動上の変化、言語能力の発達、睡眠障害の解消があげられている。行動上の変化として落ち着きがでた、まねをするようになった、視線が合い、親と接触が増えたがあり、言語能力の発達としてことばの理解、自発的発語があげられている。そして生理学的レベルが関係すると考えられる睡眠障害が、落ち着きがでて解消されたことが報告されている。

母親の変化として接し方の変化、子どもを理解する際の視点の変化、子どもに対する母親の心情の変化があげられている。

また、表4のビデオ・フィードバックについての感想では、ビデオテープによるモデルの観察が母親の雄一に対する接し方、雄一を理解する際の視点の置き方に大きな影響を与えたことがわかる。また、自宅でセッションのビデオテープを見るこ

表1 ビデオテープを見ての気づきと工夫

	I 期	II 期	III 期
子ども	楽しい表情 楽しいときことばが出る	私が働きかけると子どもが嫌がる 子どもの行動の意味	表情の変化 子どもの行動の意味 子どもの気持ちや意図
自分	ことばかけが少ない 積極的に遊んでいる リラックスしている	手を出しすぎる 子どもを見守ることができない 子どもの気持ちを引きつけている	うまく関わっている こうすればもっとよくなる 子どもの気持ちと自分の気持ちのギャップ
親子	楽しそう 親がいると子どもは安心する 活気がない	楽しくない、つまらない リラックス、楽しい 気持ちが通じ合っている	リラックス いい雰囲気 自然な感じ
工夫	声かけを多くする 体を使った遊びを多くする 子どもを観察し、要求に応える	じゃましないように遊ぶ 集中しているときは見守る 子どもの視線に注意する	視線、表情から気持ちを理解することばや仕種でわかりやすく伝える ことばかけを多くする

とで、夫婦ともに雄一に対する接し方や理解の仕方が変わり家族の絆が強まったことが報告されている。これは母親だけでなく、父親の変化にもビデオ・フィードバックは大きな影響を与えたことを示している。

4. PAC 分析

1) 発達に遅れのある雄一について
クラスター分析の結果は図2のようになった。連想された13項目のうち単独でのイメージはプラスが8、マイナスが2、中立が3でプラス優位である。

表2 モデルビデオを見ての母親の感想

-
- ・雄一の動きについてまねしたり、行動に沿ったことばなど声のかけ方がいい
 - ・雄一はまねされることに安心し、心を許すように思える
 - ・援助者は雄一の癖をよく見ていて、雄一のまねをしていることが多くあった
 - ・援助者が雄一の視線を追ったり、表情や仕草をまねているうちに、雄一と援助者の目が合ってきて、最後は自分から援助者に甘えるようにおんぶされた
 - ・援助者は私より声が大きく、声の大きさも子どもの気持ちを引きつけるには大事な要素のようだ
 - ・援助者は雄一の気持ちに敏感に反応して、雄一の出す声や表情をまねて親近感を感じさせている
 - ・雄一の遊んでいるときは手を出さず、雄一の気持ちに沿った動きをしている
-

表3 子どもと母親の変化

子 ども の 変 化

- ・親に雄一のことをもっと理解しようという気持ちが出てきたら、雄一に落ち着きが出て変わった
 - ・視線がよく合うようになり、親の顔に触れることが多くなった
 - ・親のいうことをよく理解するようになった
 - ・以前より楽しそうで、よくまねをするようになった
 - ・一緒に遊んでいて気分が盛り上がると、自分の言って欲しいことばを出すようになった
 - ・落ち着いてきたら、睡眠障害がなくなった
-

母 親 の 変 化

- ・援助補助者と雄一のVTRを見てから雄一に対する接し方が変わった
 - ・自信と落ち着きをもって雄一に接するようになった
 - ・雄一といると楽しいと感じるようになった
 - ・雄一の気持ちになって考えることができるようになった
 - ・雄一の世界に入っていこうと努力して、雄一のことわかるようになった
-

表4 ビデオ・フィードバックについての感想

全体的なビデオフィードバックの感想

- ・最初はつらい、行きたくないという思いが強かった
＜雄一が遊んでいるとき手を出すシーンを見せられて、なぜいけないのかわからなかった。自分の子どもに対する関わり方を、どうして他人からとやかくいわれなくてはならないのかと思った。＞
- ・援助者と雄一が遊んでいるテープを見せられてはじめて助言の意味がわかり、そこから気持ちが前向きになった
＜テープを見て、これまでいわれてきたことの意味に「はっ」と気づいた。それまで雄一が遊んでいることを一緒にやったり、ことばかけをすることが関わることだと思っていた。これまで自分は雄一にありがたくないことをやっていたことに気づき、雄一にとってうるさくないように関わろうと思った。＞
- ・援助者と雄一のテープを見て参考になった
＜援助者は雄一の動きに合わせるようにことばをかけ、雄一は甘えるように援助者におんぶされ、気持ちに沿ってことばをかけることが大事なことがよくわかった＞

自宅でビデオテープを見ることについて

- ・最初恥ずかしい、つらいと思う気持ちが強かった
＜私が働きかけても雄一はそれに反応しない。それを夫に指摘されるとムッとして素直に受け取れなかった。＞
 - ・助言の意味に気づくようになって、素直な気持ちでVTRを見るようになった
＜表情の変化に気づくようになり、この働きかけはよかった、これまで雄一が自分をじゃまだと思っていたなどわかるようになった。これまで雄一はいろいろ訴えていたのに母親である自分がわかってなかったの、雄一は虚しい気持ちになっていたと思う。夫の意見を素直に受け止められるようになり、これまで自分は他人の目を意識していたことがわかった。＞
 - ・私が変わっていったように夫も変わり、家族の絆が強くなった
＜助言の意味が分からなかったの夫に相談するが夫もわからない。しかし、私が助言の意味に気づくと夫もその意味がわかり、夫婦とも雄一についての理解の仕方、接し方が変わった。夫も雄一とよく遊ぶようになり、雄一が夫と一緒にいることを喜ぶようになった。そのため更に家庭が楽しい雰囲気になった。＞
-

母親によるクラスターの解釈はクラスター1が「幼稚」～「おかしい」までの4項目。幼稚というのはものの理解が幼いということで、そのために勘違いも生じる。この勘違いは自閉症の特徴で、勘違いをすると滑稽でおもしろく、おかしさが伴っている。クラスター2は「よく動く」～「単純」までの7項目。何となく落ち着かないときによく動いていて、それは単純といえる。よく動いているときは楽しそうにニコニコして、このしぐさがかわいい。このことと人なつっこいと甘えん坊が関係していて、甘えん坊だから人なつっこくて誰にでも甘えている。素直さは大人のいうことをそのまま受け止めて行動するので単純にもつながる。クラスター3は「勘が鋭い」～「偏食」までの5項目。勘が鋭いというのは敏感すぎてやりにくい部分が多い。こだわりと関係するかもしれないけどちょっとしたことを気にしすぎてしまう。感受性が強いというのは音に敏感なところやふと見ると涙をこらえていて、そんなときまともに顔を見ると目をそらし恥ずかしそうにするなど、人並みの感情があると思う。

クラスター間の比較と全体については、クラスター1とクラスター3を比較して、幼稚な反面勘が鋭く、ほかの子どもが考えもしないようなことをする。幼稚だと思う反面優秀だと思う。全体としては、雄一の個性や性格がよく現れていて、自閉症や幼稚であってもふつうの子どもと変わらない。

以上が母親自身の解釈である。次に援助者の解釈を加えて総合的に解釈する。まず、各クラスターの内容について吟味した後で、それらの関係や全体の特徴について明らかにする。

クラスター1はよく動くことや勘違いはマイナスイメージであるが、ものごとを理解する力が幼く、意味を取り違えることをおかしいと感じており「ディスコミュニケーションのおかしさ」というクラスターといえるだろう。

クラスター2はあちこち動き回りながら、ニコニコして人なつっこく甘える雄一のかawaiiさであり「甘えん坊で人なつっこい雄一」というクラスターといえよう。

クラスター3は音やちょっとした環境の変化に敏感で涙をこらえたり恥ずかしそうにするなど感

受性豊かな雄一についてであり「感受性の強い雄一」といえよう。

全体的には雄一の示す自閉症の行動特徴を肯定的に捉え、自閉症の特徴的行動があってもごくふつうの子どもとして見ていることを示している。

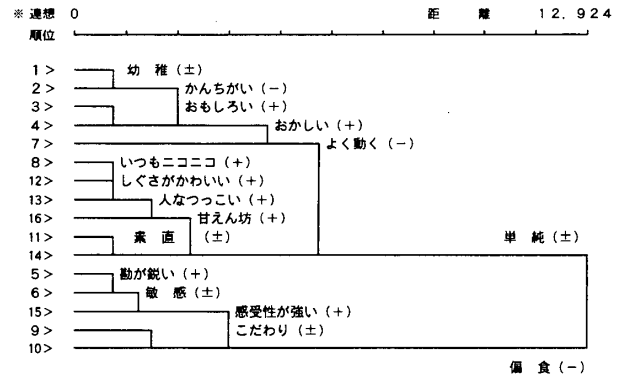


図2 「発達に遅れのある雄一について」のデンドログラム（各項目のカッコ内の符号は単独でのイメージ）

2) 雄一と接する私について

図3に示すように、連想項目のなかで重要順位の高い順にほぼ1/3となる4項目を取り上げると①愛情、②リラックス、③平静、④笑顔、となる。子どもをしっかり受け止め、リラックスしたなかで笑顔をもって接していることが伺える。全項目の単独でのイメージは、プラスが8、マイナスが2で中立が3と、プラス優位である。

母親によるクラスターの解釈はクラスター1が「まっすぐに見る」～「一生懸命」までの3項目。愛情で子どもをよくしようとすれば、まっすぐ見るし、一生懸命になる。

クラスター2が「気が抜けない」～「幼い扱い」までの3項目。いつも何かしら気が抜けないけど、気が抜けないながらも、雄一に一生懸命に訴えるときは、わかりやすいように訴えるので、つい幼い扱いになる。

クラスター3は「もどかしさ」～「いらいら」までの3項目。生活のいろいろな面で教えようとすると、雄一は苦手なことが多いから待っていないといけな。それは我慢で、前に進まない場合

*重要順位の方が重要であるが、データの一部が欠落したため連想順位とした。

はもどかしい、ちょっとイライラも感じる。

クラスター4が「楽しい」～「リラックス」までの4項目。これはみんな明るい項目で、楽しいときは心も落ち着いている。自然と笑顔もでるし、リラックスもしている。

クラスター間の比較と全体イメージについてはまず、クラスター1とクラスター4を比較して、クラスター1は緊張を伴っているがクラスター4は緊張がなくリラックスしている。楽しく、平静で、笑顔があり、リラックスしているときは、雄一に障害があることを忘れている。また、クラスター1、クラスター2、クラスター3は障害に関しての接し方で、一生懸命さが強くて緊張感がある。いつもはこのようなことを意識することはないが、これを見て気づいた。全体としては、雄一に障害があってもなくても雄一は雄一で、すごくかわいいし、愛情を持って接していきたい。障害があっても関係ないという気がする。そのことが愛情、楽しい、一生懸命に現れている。最近障害があるということを忘れていたときがあるけど、実際は障害がある。以前より意思疎通がスムーズになったので、障害があることを忘れていた。

以上が母親自身による解釈である。雄一についてと同様、クラスターの内容を吟味した後で、それらの関係や全体の特徴について明らかにする。

クラスター1は、雄一に障害があるからこそ、雄一が何をしようとするのかわかりたいと、まっすぐ見て、一生懸命に関わる「雄一を理解しようとする私」といえるであろう。

クラスター2は、気が抜けないながらも、よくなるのではないかと期待して関わる「期待して働きかける私」と命名してよいだろう。

クラスター3は、生活のあらゆる面で教えることが多いが教えたことがなかなか身につかず、イライラしても我慢しながら教えている「我慢して教える私」といえよう。

クラスター4は、雄一を客観的に見るができるようになり、笑顔で関わるが増えた。そしてリラックスすることができるようになり、それにつれ雄一といることが楽しくなってきたということから「リラックスして働きかける私」といえるだろう。

全体としてみるとクラスターの構造は、緊張感

とリラックスの2つのクラスターからなり、緊張感の下に3つの下位クラスターがある。この3つは自閉症である雄一を理解し、我慢しながら発達の期待をもって働きかける私としてのまとまりで、リラックスのクラスターは雄一が自閉症であることを忘れて働きかけ、楽しんでいる私である。一見矛盾しているようにあるが、雄一には障害があると意識して接する自分と障害のあることを忘れて働きかけている自分がともに意識化され統合されている。

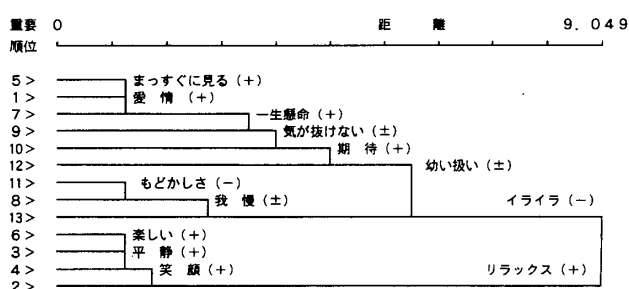


図3 「雄一と接する私について」のデンドログラム（各項目のカッコ内の符号は単独でのイメージ）

IV. 考察

1. コミュニケーションの進展とビデオ・フィードバック

図1および各エピソードは母子間の情動的コミュニケーションが介入を重ねるにつれ進展していることを示している。エピソード6のように親子が一体化したかのような動きのなかで展開されるやりとりは、情動的コミュニケーションが豊かに展開されている証である。このことから、本研究の目的のひとつは達成できたといつてよい。では、親子のコミュニケーションの進展にビデオ・フィードバックはどのように影響したのであろうか。

自閉性障害の雄一と母親のコミュニケーションの進展過程を見ると、母親が自分の視点で雄一の行動を理解し、雄一の意図を汲み取ることができないため、母親主導の働きかけとなりコミュニケーションが成立しにくい状態から、雄一の意図に気づくようにはなっても母親はその意図に沿った働きかけができない状態を経て、母親が自己と雄一の相互の視点に立ち、雄一の意図を汲み取り、コ

コミュニケーションを深化させることや雄一の意図に沿いながら徐々に母親の意図する方向に巻き込みコミュニケーションを進展させていく展開である。この一連の過程で、母親が雄一の意図を汲み取れるようになったことが、雄一の視点から自分の行動を認識し、コミュニケーションを深化させる、言い換えると関係が変わる⁷⁾分岐点となっている。母親の視点のみから雄一に働きかけているときの母親は、自分たち親子のやりとりがどのように展開しているのか全く理解していなかった。そこには母親の思いを実現させようとする一方的な働きかけしかなかった。それに気づき、雄一に対する働きかけを変える契機となったのが10セッションの面接で提示した援助補助者と雄一のビデオテープである。その意味でこのビデオ提示はコミュニケーションの進展に大きな役割を果たした。

なぜこの提示が母親の気づきを喚起させたのか以下に考察する。母親の主訴は言語訓練と自閉症状の軽減である。母親はこれまで言語訓練を受け、もう少し訓練をすると伸びるといわれている。また、学習塾にも通わせるなど訓練的指向は強い。これを反映して、ことばかけをたくさんして、いろいろ教えることが必要だという意識が強かった。ベースライン期から第I期にかけては雄一が視界に入れば何かしら働きかけないとならないと思っているかのような働きかけ方であった。雄一はその働きかけに応じることもあったが応じないことが多かった。母親はそれにも関わらず働きかけたのはなぜだろうか。

自由遊び場面で雄一は母親の働きかけが気に入らないとき、エピソード2や3のように声を出して歩き回るか母親のいない場所に移りこれまでやっていたことを継続する。このとき雄一ははっきりとわかるような表情の変化を示すわけでもなく、声を出しても何をいったのか聞き取れるわけでもない。見方によれば雄一の行動は、母親の働きかけを喜んでいともとれる。日常生活で雄一が好んで行っていること、例えば雄一がシールの文字に魅入る行為は、雄一が単に文字を好むから魅入るというのではなく、安心して魅入ることができる状況があって生じる行為であり、他者がそこに入ってくることを望んではない。ところが母親は、雄一が好む行為を一緒に行うことが必要だと

信じている。そのうえ、これまでに受けた言語訓練では、日常生活の中で母親が雄一に多くの語りかけを求めているため、形や数を語りかけ、教えようとするような働きかけになったと考えられる。母親にすれば雄一の好むことを訓練するように働きかけることは、雄一にとって不快なこととは思えなかったであろう。したがって、援助者の助言は信じ難く感じられ、表4のようなつらく感じるようになったのであろう。

そのようなときにビデオテープが提示された。表4のようにこれまで援助者の助言を聞いて、母親自身の働きかけが問題であることに気づきつつあったが、映像を提示されるとこれまでの助言の意味が一気に明瞭になってきた。いわゆるメタ水準の関心の深まり⁶⁾があり、そのようなときに提示された映像が引き金の役割を果たしたと指摘できる。つまり、映像を見てその意味を理解できるまでに、子どもについての知識が蓄積されていたということである。母親は援助者とのビデオ・フィードバック面接において、雄一の視点に立ち自分と雄一の行動を理解しようとしてきた。そのうえで自宅において雄一とのテープを見ている。雄一の行動をこれまでになかった視点で見ることが求められ、これまでの雄一についての知識と葛藤する状況にあった。それが援助者の助言を半信半疑という表現で示している。そのとき映像では、援助補助者が母親とは対極に位置するような関わり方で雄一に接し、雄一も母親の前では見せたことのない愛着行動を示していた。この映像を見たことで母親はこれまで助言されたことが瞬時に理解できたのであろう。これ以降、母親は雄一の視点から自分の行動をはっきりと認識するようになった。そして、このことが表3の感想のように援助補助者の働きかけを取り入れ、エピソード5, 6, 7で母親が示した行動に繋がったと考えられる。財部(2000)²⁴⁾はビデオ・フィードバックは自分自身の行動や認識を変える際に有効に機能すると指摘しているが、ここでも同様のことが指摘できる。酒木(1994)²⁰⁾は自閉症児に対し他者論的立場に立った心理療法の重要性を指摘しているが、親子の関係であってもこれは重要で、ビデオ・フィードバックは他者の立場に立って相手を理解することを推進することに有効なことを示している。特

に本研究では、自宅で自由遊び場面のビデオテープを見て、親子の行動を観察しており、これがメタ水準の関心の深まりや広がり大きく貢献していることは表1からも明らかである。

ビデオ・フィードバックは母親だけではなく父親の認識と行動に影響を及ぼしている。表4には自宅でテープを父親が見ることにより、母親と同じように雄一を理解するようになったこと、雄一とよく遊ぶようになり家族の絆が強くなったことが報告されている。また、テープを見ることを通して夫と養育に関して意見を交換するなど、母親にとって精神的サポートを得ることに繋がった。

これらのことが雄一にとって落ち着いて生活できる環境を作り出し、表3に示すような変化をもたらしたと考えられる。

2. 母親の認識変化とPAC分析

親子のコミュニケーションが進展し、母親の雄一に対する認識と自分自身の働きかけについての認識も変化したことが明らかにされてきた。母親の雄一に対する認識の変化と雄一に対する働きかけはほぼ同時に変化し、フォロー・アップでもこの状態は確認されている。そこで、PAC分析を行い母親が雄一をどのように理解し、同時に母親自身の働きかけについてどのように理解しているか明らかにすることを試みた。PAC分析はフォロー・アップ終了後2カ月後に行った。支援開始前にPAC分析を行っていないため変化を直接比べることはできないが、母親の支援開始前は雄一の障害のことが強く気になり、雄一の立場から行動を見ることができなかつたことから、このような結果は得られなかつたと考えられる。したがって、この結果をどのような構造へと変化したかを評価する評価機能として使うことはできないが、自己理解促進機能として使うことは可能である。

図2では母親は自閉症の特徴的行動を肯定的にとらえ、自閉症状があってもふつうの子どもと変わらないというイメージである。また図3では、緊張感を持ちながら障害のある雄一に働きかける自分とリラックスしたなかで働きかける自分をイメージしている。これらは、母親は雄一を自閉症であると認識しつつも、障害があるということを超えて我が子が愛おしく、共にいることが楽しい

存在と認識していることを示していると考えられる。つまり、PAC分析からはフォロー・アップ時の雄一とのやりとりが一時的に成立したのではなく、この根底には障害のある雄一というより、愛おしい雄一としての認識の存在、すなわち子どもの障害受容がかなりできていることが推測できる。

以上のように面接やアンケートでは得られない雄一像をPAC分析ではデンドログラム(樹状図)により構造として捉えることができ、母親が自分自身の雄一像を確認し、同時に援助者はこの意味を母親と共有できたことで共有知識理解機能としても有効で、発達臨床でもこの手法は有効であることを示している。

V. まとめと今後の課題

上述した結果から自閉症圏障害児と母親の情動的コミュニケーションを進展させるためにビデオ・フィードバック面接は有効であるといえる。情動的コミュニケーションの段階にある子どもに対して、象徴レベルのコミュニケーションで働きかける親は決して少なくはない。この場合には親の子どもに対する期待が大きく、何とかことばを獲得させたいとか早くふつうに発達してほしいという思いが強いことが多い。しかし、これが子どもをありのままに受け止めることを困難にし、子どもに負担をかけてしまう結果になりやすい。

とくに自閉症圏障害は愛着性の形成に困難を伴うことが指摘されているが、安定した愛着形成には情動レベルのコミュニケーションが活性化される必要がある^{10),11)}。このように考えれば、子どもの力動感 vitality affects²²⁾が活性化され快適な情動を体験できるように、親が子どもをありのままに受け止め、「いま、ここ」を親子がともに楽しめるような支援が必要である。

本研究では自宅でビデオテープを見るという手続きを用いて有効であった。それは本症例の父親のように面接に参加できない養育者にとっては、自宅でセッションの様子を知るとともに子ども理解と働きかけについて考えることができるからである。本症例では、母親が自宅に持ち帰ったテープを父親も毎回見て、母親と同じように変化して

いった。この過程で母親は面接での疑問や悩みを語り、それを父親が受け止めることで母親は精神的サポートを受けることができた。これが家族の絆が強まる結果をもたらした。このように夫婦の関係が良好な場合には有効となるであろうが、保護者のいずれかがビデオを見ることできない、あるいは相談できないような場合も同様に考えてよいか否か検討する必要がある。また、親自身が自分の親との葛藤を持ち続けている場合などもあり、ビデオ・フィードバック面接の適用が有効となるにはどのような要因が必要か検討する必要がある。

PAC分析の心理臨床への応用は始まったばかりで、発達障害臨床への適応は緒に着いたばかりである。カウンセリングへの適用でも指摘されているが⁴⁾発達障害の心理臨床においても適応対象や刺激語の選択、得られた情報の活用など今後検討する必要がある。

最後に、本症例は諸々の事情から支援を1年で終了することになった。したがって雄一がこの後どのような発達経過を見せているか追跡できていない。情動レベルのコミュニケーションが活性化することが、自閉症圏障害児の発達にどのような影響を及ぼすのか検討することは今後の大きな課題である。

謝 辞

本研究を行うにあたり中嶋恭子さんと宜保澄恵さんに多大な協力をいただきました。心から感謝いたします。

文 献

- 1) Baron-Cohen, S. (1988) : Social and pragmatic deficits in autism : Cognitive or affective? *Journal of Autism and Developmental Disorders*,18,379-402.
- 2) Hobson,R,P. (1989) :Beyond cognition:A theory of autism. In Dawson, G (ed), *Autism Nature, Diagnosis, and Treatment*, 282-309. Guilford Press, New York.
- 3) 井上孝代 (1997) : 留学生の文化受容的態度とカウンセリングー PAC分析による事例研究を通してー, *カウンセリング研究*, 28, 21-225.
- 4) 井上孝代 (1998) : カウンセリングにおけるPAC (個人別態度構造) 分析の効果、*心理学研究*, 69 (4), 295-303.
- 5) Kanner,l.(1943) : Autistic disturbances of affective contact. *Nervous child*,2,217-250.
- 6) 鯨岡峻 (1997) : 原初的コミュニケーションの諸相. ミネルヴァ書房. 京都.
- 7) 鯨岡峻 (1998a) : 関係が変わるとき : 秦野悦子, やまだようこ (編) 「コミュニケーションという謎」, 173-200, ミネルヴァ書房. 京都.
- 8) 鯨岡峻 (1998b) : 関係発達論と原初的コミュニケーション. *乳幼児医学・心理学研究*, 7, 11-25.
- 9) 鯨岡峻 (1999) : 関係発達論の構築. ミネルヴァ書房. 京都.
- 10) 小林隆児, 白石雅一, 石垣ちぐさ, 中澄襟子, 竹之下由香 (1997) : 乳幼児期の自閉症圏障害における情動的コミュニケーションと母親の内的表象, *乳幼児医学・心理学研究*, 6, 9-20.
- 11) 小林隆児 (1999) : 関係障害から見た自閉症理解と治療, *発達*, 78, 22-35.
- 12) 小林隆児 (2000) : 社会情緒的発達と言語認知発達をつなぐものー自閉症の関係障害臨床ー. *東海大学健康科学部紀要*, 5, 9-17.
- 13) 小林隆児 (2000) : 自閉症の関係障害臨床ー母と子の間を治療するー, ミネルヴァ書房. 京都.
- 14) Main, M., Kaplan. & Cassidy, J. (1985) : Security in infancy, childhood, and adulthood : A move to the level of representation. In I. Bretherton & E. Waters (Eds.), *Growing Points of Attachment Therapy and Research. Monographs of the Society for Research in Child Development*, Vol.50 (1-2, serial No.209), 66-104.
- 15) 内藤哲雄 (1993) : 個人別態度構造の分析について, *信州大学人文学部人文科学論集*, 27, 43-69.
- 16) 内藤哲雄 (1997) : PAC分析入門ー"個"を科

- 学する新技法への招待－，ナカニシヤ出版。京都。
- 17) 野村東助 (1992)：自閉症における社会的障害：野村東助，伊藤英夫，伊藤良子（編）「自閉症児の言語指導」，1-19，学苑社。東京。
- 18) Ozonoff, S., Pennington, B.F. & Rogers, S. J. (1991): Excutive function deficits in hight-functinoing autistic indivisuals: Relationship to theory of mind. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 32, 1081-1105.
- 19) Richer, J, M. (1990) : The value of motivational conflict in the clasification and treatment of children's disturbed behavior. The 12th Congress of International Assosiation for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Profesinos, Kyoto, Japan. 栗田広訳，第12回国際児童青年精神医学会論文編集委員会（編）(1992)：児童青年精神医学への挑戦－21世紀に向けて－第12回国際青年精神医学会論文集。177－188。1992。
- 20) 酒木保 (1994)：自閉症児の心理療法 他者論的展開とその接近法，*心理臨床学研究*，12 (2)，109-120。
- 21) Sameroff, A. J. (1993) : Models of development and developmental risk. In C. H. Zeanah (Ed.), *Handbook of infant mental health*. 3-13, New York, Guilford Press.
- 22) Stern. D. N. (1985), *The Interpersonal World of the Infant : A View from Psychoanalysis and Developmental Psychology*. Basic Books. 小此木啓吾，丸田俊彦，神庭靖子，神庭重信訳 (1989)：乳児の対人世界－理論編－，岩崎学術出版。東京。
- 23) 財部盛久 (1999)：話しことばのない広汎性発達障害児に対する共同行為ルーティンによるコミュニケーション指導－母親を共同指導者として－。琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要，1，53-68。
- 24) 財部盛久 (2000)：VTR・フィード・バックを用いた無発語精神遅滞幼児の母親に対するコミュニケーション指導，琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要，2，45-59。
- 25) 棚原亨，財部盛久 (1999)：障害幼児を持つ母親の障害受容に関する個人別態度構造分析，琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要，1，141-151。